

## 新トリアージタグの有用性

金丸 勝弘<sup>1,2</sup> 清水 一<sup>2</sup> Mohammad Ghazizadeh<sup>2</sup>  
 松本 尚<sup>1</sup> 益子 邦洋<sup>1</sup>

<sup>1</sup>日本医科大学千葉北総病院救命救急センター

<sup>2</sup>日本医科大学老人病研究所病理部門

## Usability of Original Triage Tag

Katsuhiko Kanemaru<sup>1,2</sup>, Hajime Shimizu<sup>2</sup>, Mohammad Ghazizadeh<sup>2</sup>,  
 Hisashi Matsumoto<sup>1</sup> and Kunihiko Mashiko<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Emergency and Critical Care Medicine, Nippon Medical School Chiba Hokusou Hospital

<sup>2</sup>Department of Molecular Pathology, Institute of Development and Aging Sciences, Nippon Medical School

表面 | 裏面

図 1

災害時に傷病者のカルテとして運用されるトリアージタグを大幅に改変した。この独自の新トリアージタグ(図1)を大規模災害訓練で使用し、その有用性を検証したので報告する。

これまで使用していたトリアージタグは広く全国で使用されている一般的なタグ(図2)で、多くの医療従事者に馴染み深いものである。

このタグの改変に至る動機となった事故が、2009年2月20日に発生した。マニラ発成田行きのノースウエスト航空機乱気流事故である(乗員乗客422人。うち負傷者47人)。成田空港では、航空機事故に備えて消火救難訓練(実機を使用し、医師会や近隣消防を含め約1,000人の参加がある)を毎年行っているにもかかわらず、この時にトリアージされた負傷者のタグには記載不備が非常に目立つもので

表面 | 裏面

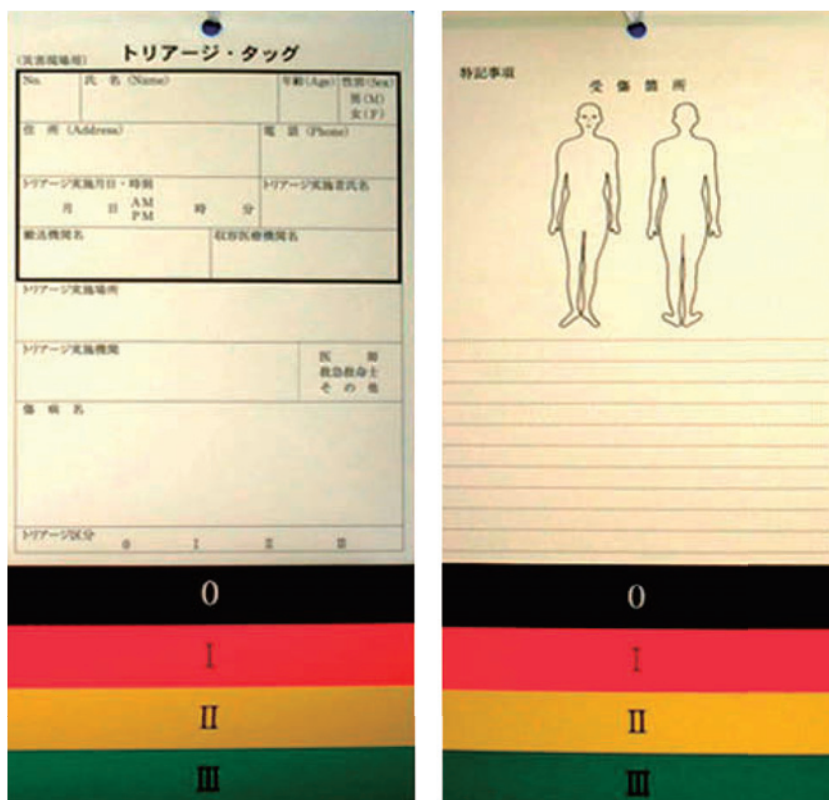


図2

あった。

これまでの訓練でも、タグの記載に空欄が多くみられたことや訓練に際してトリアージの事前勉強を要することなどの問題点があった。これらを解決し、かつ必要な情報を過不足なく、迅速に記載できることをコンセプトに変更されたのが新トリアージタグ（図1）である。表面には、START式トリアージの判断基準を記載し、裏面には時間経過で傷病者情報を記載することを可能にし、全身観察結

図1 新トリアージタグ

表面には、START式トリアージの判断基準を記載した。裏面には、時間経過で傷病者情報を記載を可能にした。

果から緊急性のある疾患群を表記したタグを作成した。

この新トリアージタグを、成田空港での消火救難訓練で使用しその実用性を検証したところ高い有用性が示唆された。今後は、裏面の記入状況および傷病者の病態とトリアージ結果の整合性などの検討を行うとともに、多数傷病者の事故や実災害における新トリアージタグの真の実力を検証する必要があると考えている。

図2 従来のトリアージタグ

全国でも広く採用されている標準的なトリアージタグ。